

先天性の性ホルモン産生酵素の欠損や Smith-Lemli-opitz 症候群などの多発奇形を伴う遺伝性の症候群などでは、尿道下裂が重要な診断根拠にもなり、小児科の日常診療においても充分な関心が払われるべきであろう。かゝる意味で、本年度は尿道下裂の発生頻度の調査を目的とした。

研究結果

先づ、新生児における尿道下裂の出生頻度をしらべた。無選択に、妊婦の入院する、一般病院（守山病院）産科を対象とした。昭和51年から3年間に出生した新生男児1,475名中、尿道下裂は1名（0.061%）のみであった。次いで、参考までに、京大小児科外来受診者のうちでの尿道下裂患者についてしらべた。昭和49年から53年までの5年間に、患者総数25,155名が受診したが、尿道下裂

は6名のみであった。ただし、本院小児科外来では、一般外来と各種専門外来とに分れていて複雑であるので、正確な実数ではなく、しかも、選択された患者についての頻度なので、尿道下裂の発生頻度の参考には出来ない。

次年度の研究方向

新生男児における尿道下裂の発生頻度は、0.061%であった。小児科の日常診療において、尿道下裂を軽視出来ないことは、先に述べたが、実際に小児科に受診する患者の実数は非常に少ない。

ところで、最近、学童・生徒の集団検尿が全国的に行われるようになり、集団検尿異常者の受診者が多くなった。次年度は、これら集団検尿異常者における尿路奇形の頻度、種類および尿異常との関係について調査する予定である。

尿道下裂に関する臨床的研究

山口大学泌尿器科 酒 徳 治 三 郎
那 須 誉 人

目的：尿道下裂は泌尿器科領域で多くみられる先天性異常であるがその発生機序はまだ十分に解明されておらず、その治療法に関して種々の手術方法がおこなわれている。

山口大学泌尿器科にて入院、手術を行なった症例の臨床統計を行なった。

対象および方法

昭和39年より昭和54年1月まで山口大学泌尿器科を受診、入院をした33名について以下の検討をおこなった。

- 1) 初診時の患者の年齢分布、2) 尿道下裂の程度、3) 性器およびその他の合併症、4) 生下時の異常について、5) 家族歴について。

結 果

1) 初診時の患者の年齢分布

| | |
|--------|-----|
| 0～4歳 | 17名 |
| 5～9〃 | 8〃 |
| 10～14〃 | 3〃 |
| 15～19〃 | 1〃 |
| 20～24〃 | 2〃 |
| 25～29〃 | 0〃 |

30～34〃 1〃 不明1名

2) 尿道下裂の程度

尿道下裂の程度については記載のあるものについて、外尿道口の位置で亀頭部、陰茎部、陰茎陰囊部、陰囊部、会陰部の5種類に分類した。その結果は以下のとおりである。

| | |
|-------|-----|
| 亀頭部 | 1名 |
| 陰茎部 | 12名 |
| 陰茎陰囊部 | 11名 |
| 陰囊部 | 1名 |
| 会陰部 | 0名 |

3) 性器およびその他の合併症

| | |
|-----------|----|
| 停留辜丸 一側性 | 1例 |
| 両側性 | 3例 |
| ソケイヘルニア | 5例 |
| 口蓋破裂 | 1例 |
| 多睾丸症 | 1例 |
| Inter sex | 2例 |
| VSD | 1例 |
| PDA | 1例 |
| hydrocele | 1例 |

sacro-lumbar hypoplasia 1例

4) 生下時の異常について

早産 2例

未熟児 1例

仮死 1例

なお妊娠前期において母親が Progesterone 製剤を服

用した例はなし。

5) 家族歴

家族歴ではイトコ同志の結婚が1組のみであった。また2卵生双生児の一方が尿道下裂で、一方は正常例が一例であった。

小児の尿路奇形に関する研究

京都大学解剖 星 野 一 正

昭和53年度の報告

京都大学医学部附属先天異常標本解析センター（施設長：星野一正）に保存してあるホルマリン固定の胎児1,011例について尿道下裂の有無を肉眼的に観察した（小松洋輔分担）。男子胎児は522例で、その中18例が奇形児であった。後者の中、下肢奇形、臍ヘルニアのある1例に短小尿道と共に尿道下裂を認めた。観察成績は表1に示す通りである。

表 1 胎児における尿道下裂の観察成績

| Normal Group | | | | |
|----------------|-------|---------|-------------|-------|
| CRL | males | females | hypospadias | total |
| 101~150mm | 146 | 132 | 0 | 278 |
| 150~200mm | 241 | 219 | 0 | 460 |
| 201~250mm | 93 | 95 | 0 | 188 |
| 250mm~ | 24 | 26 | 0 | 50 |
| Abnormal Group | | | | |
| | 18* | 17 | 1* | 35 |
| Total | 522 | 489 | 1 | 1,011 |

昭和54年度の研究方針

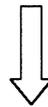
経胎盤ホルモン投与による尿路奇形誘発に関する基礎的観察を実験動物を用いて行う。昭和54年度にはまずマウスを用い、非ステロイド系 (non-steroidal) のディエチルスチルベストロール (diethylstilbestrol) とステロイド系のエチニールエストラジオール (ethynilestradiol) を妊娠マウスに投与し、出生後3週間の仔について肉眼的に尿路奇形を観察し、次いで成熟後の10週令において殺し剖検観察の上、組織学的検索を行って尿路奇形を腎臓より外尿道口に至る全過程において詳細に研究する。

ホルモン投与時期を、妊娠0日（産陰を認めた日）から9日、12日、15日の3時期にして、催奇形性の臨界期の見当をつけ、次いで臨界期と思われる時期の前後の期間について詳細に催奇性を研究する。腎臓の発生を含む全尿路の発生過程の相違に基づく臨界期とホルモンの催奇量の差異との関係を追究し、ホルモンによる尿路の催奇形機序の解明に資するのが目的である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的:尿道下裂は泌尿器科領域で多くみられる先天性異常であるがその発生機序はまだ十分に解明されておらず,その治療法に関して種々の手術方法がおこなわれている。

山口大学泌尿器科にて入院,手術を行なった症例の臨床統計を行なった。